

大学生における仮想的有能感と運動部活動経験との関連

山田 清楓
(静岡大学大学院)

1. 研究目的

本研究は、仮想的有能感と運動部活動経験との関連を明らかにし、運動部活動が仮想的有能感の抑制に関係するのかを検討することを目的とした。

2. 研究方法

対象は、平成 29 年度の国立大学法人 S 大学の新生 1,308 名だった。

調査は、平成 29 年 4 月に無記名自記式質問紙を用い、集合調査法で行った。調査項目は、基本属性、中学及び高校時代の部活動所属(運動部、文化部、無所属)、仮想的有能感尺度 11 項目、自尊感情尺度 10 項目、運動有能感尺度 12 項目、スポーツ観尺度 30 項目とし、4 尺度とも回答は 5 件法で得た。

分析は、無効回答を除いた 1139 名分のデータを単純集計し、各尺度の得点を算出した。その後、男女別及び部活動の所属別に各尺度間の平均点の比較、各尺度間の相関分析を行った。そして、仮想的有能感尺度及び自尊感情尺度から、4 類型(有能感タイプ)に分類し(図 1)、有能感タイプと部活動所属との関連を調べた。さらに、各尺度の平均点で高群と低群の 2 群に分け、有能感タイプ、部活動の所属との関連を調べた。検定は全て、統計ソフト IBM SPSS Statistics ver.22.0 を用い、有意水準は 5%とした。

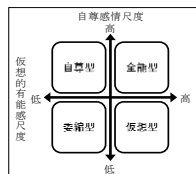


図 1: 有能感タイプ

3. 結果及び考察

(1) 部活動所属別の人数

中学と高校ともに運動部所属者が男子で女子に比べ多かった。

(2) 男女別にみた各尺度得点の平均値

仮想的有能感、自尊感情及び運動有能感の各尺度得点の平均値は、いずれも男子で女子に比べ有意に高値を示した。

(3) 部活動所属別にみた各尺度得点の平均値

仮想的有能感尺度得点の平均値は、中学と高校及び男子と女子ともに 3 つの部活動間でいずれも有意な差はみられなかった。自尊感情尺度得点では、高校男子の運動部でのみ文化部に比べ有意に高値を示した。運動有能感尺度得点では、総得点及び 3 つの下位因子得点が、運動部で文化部と無所属に比べいずれも高値を示した。スポーツ観尺度得点でも同様な傾向にあり、運動部で文化部に比べ高値を示した。運動部活動所属者は文化部と無所属に比べ仮想的有能感に相違はないものの、運動有能感とスポーツ観とも

に高いことが明らかであった。

(4) 仮想的有能感と各尺度との相関:

自尊感情との間に、女子全体で有意な負の相関がみられた。運動有能感の間では、男子全体で下位因子である身体的有能さの認知との間で有意な正の相関、同じく統制感及び受容感との間で有意な負の相関がみられ、これらが相殺し運動有能感総得点の間には有意差はみられなかったと推察する。女子全体では、運動有能感総得点との間に有意な負の相関が認められた。スポーツ観との間では、男女ともに総得点と全ての下位因子との間で有意な負の相関を認めた。部活動別にみると、運動部男子では、運動有能感及びスポーツ観との間の相関はいずれも男子全体と同様な傾向にあったが、運動部女子では、運動有能感との間にはほとんど相関を認めなかった。スポーツ観の間には男子と同様に有意な負の相関が認められた。一方、文化部男子では、運動有能感及びスポーツ観との間でほとんど有意な相関を認めなかったが、文化部女子では運動有能感及びスポーツ観との間にいずれも有意な負の相関が多く認められた。仮想的有能感と自尊感情及び運動有能感との相関関係に明らかな男女差が認められ、運動部所属と文化部所属でも仮想的有能感と運動有能感及びスポーツ観との相関関係に男女で明らかな違いがみられた。

(5) 運動有能感及びスポーツ観の高群と低群における有能感タイプの分布

全体の有能感タイプの分布は、全能型 306 人(26.9%)、仮定型 255 人(22.4%)、自尊型 327 人(28.7%)及び萎縮型 251 人(22.0%)であり、4 タイプの分布に大きな隔たりはなかった。部活動所属別にみた 4 タイプの分布にはいずれも有意な差は認められなかった。運動有能感の高群と低群で 4 タイプの分布を比較した結果、男女ともに有意差が認められ、高群で仮定型が少なく、低群で多い傾向が明らかであった。スポーツ観の高群と低群でも同様な傾向であった。運動有能感及びスポーツ観を高めることで仮定型を減らす可能性が示唆された。

4. 結論

上記の結果から、仮想的有能感と運動有能感及びスポーツ観との関連は男女で異なり、仮想的有能感の抑制には、1) 男子では運動部活動経験が、女子では文化部活動経験が、2) 男女ともにスポーツを好意的に捉えること(スポーツ観の形成)の 2 つが関係する可能性が示唆された。